

史料紹介

史料紹介；成尾常矩「鹿児島城屋形及び周辺図」

三木 靖¹⁾

1) 891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1 鹿児島国際大学

1 成尾常矩が明治6・1873年、鹿児島城を子孫に伝えたいと屋形図を描いた

本図は図中の文章から、成尾常矩が明治6・1873年3月24日に、40年以前の図（天保4・1833年になるので、天保城下図かその期の図と思われる）を手元に置き、記憶しているところを「旧御屋形御曲輪の図」として子孫に残そうと清書したものを、明治10・1877年の春秋の騒擾（西南の役で5月には政府軍の守備する鹿児島城を西郷勢が攻め、9月には西郷勢の守備する鹿児島城を政府軍が攻めた）により激しく痛んだので、それを補い明治11・1878年3月中旬に改めて書き写したものと分かる（本図は縦53.1cm、横77.2cm）。

常矩が子孫に残そうとしたのは、この鹿児島城が慶長7・1602年冬、家久により、鹿児島の山上後に築かれて以来、島津家代々の御居城であったのに、明治5・1872年伊田譲陸軍少将が城を受け取り鎮台兵卒の屯営になったこと、明治6・1873年10月18日に焼失してしまったこと更に700年来の家臣として蒙ってきた恩を忘れ、よろず洋風に傾き、更に廃刀令が出され、国々の境関が取り除かれ、城郭は破却され、後世には封建の敵備は昔語りとなってしまう、城と城下が商家市街になるという遺憾な状況を慮ったためだった。

とはいえ、常矩は本図を絶対視せず、屋敷の広狭や、街路の違いは避けられないと思うので、見る者は留意してもらいたいと謙虚な姿勢であった。

常矩は、この「旧御屋形御曲輪の図」作成の際、「御殿内御座々図」は別紙に記したとしており、両図がセットになっていた。本図は以上図中の文章から「旧御屋形御曲輪の図」と呼ばれているが、理解しやすさに加え、先行する論稿を考慮し、成尾常矩「鹿児島城屋形及び周辺図」としたい。

さて本図の筆者常矩の子孫は「成尾（盛）家中心の親族及戚族之系誌略（昭和36年3月現在 追補 平成9・1997

年2月）」によれば以下の様になっている。男子に常経、常彦、武二、淳三がいた。その常彦の男子に常壽、静夫、盛二がおり、静夫の男子に静一、哲二、修三、伸彦がいた。このうち、武二系の子孫の方から平成11・1999年5月26日に紹介され、三木に託されたのが本稿で取りあげる「旧御屋形御曲輪の図」である。ところで、「旧御屋形御曲輪の図」に基本的に同一の図が鹿児島市立美術館に存在しており、五味克夫氏「鹿児島城の沿革—関係史料の紹介—」（鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（26））『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』鹿児島県教育委員会昭和58・1983年3月刊1～14頁）に詳細で周到な解説付きの報告がなされ、同書249頁（図版58、城下絵図（4））に成尾常矩城下絵図（部分）（鹿児島市立美術館蔵）として写真版が掲載されている。またこれ以前五味克夫氏「薩藩史料伝存の事情と事例」（『鹿児島史学 27』鹿児島大学法文学部昭和54・1979年11月刊）のなかの「2 成尾常矩と鹿児島城図」で鹿児島城本丸跡発掘調査担当の戸崎勝洋・吉永正史両氏の調査をもとに、草牟田の常矩の曾孫哲二（故人）のミツ子夫人に会い、主要史料を解説され、常矩孫の静夫が昭和25・1950年、常矩がかつて編集したものを増補した「成尾家親戚之系略誌」や、常矩が慶応2・1866年に書いた「自筆家譜」を精査し、聞き取りを加えて、常矩の業績を高く評価した。なお五味氏「薩藩史料伝存の事情と事例」は、常矩の「御殿内御座々図」が、鹿児島城本丸の発掘調査に最大の恩恵をもたらしたことを強調してやまない。誠に然りである。「旧御屋形御曲輪の図」のセットの一方が称賛されたのであるから、当然本図も称賛されたことになる。

因みに本稿で使用した「成尾（盛）家中心の親族及戚族之系誌略」は、五味氏が使用した「成尾家親戚之系略誌」の関連系図と内容はほぼ重なっていて、「旧御屋形御曲輪の図」を託された際に併せてコピーをいただいたものである。



図1 「鹿兒島城屋形及び周辺図」全体図

2 鹿兒島城の屋形としての御本丸と二之丸が中央に描いた

本図は五味克夫氏論稿で広く知られているが、その内容の解明は今後の課題と考えており、ここに若干の考察を加え課題解明の材料としたい。

さて、図の下方左寄りに、凡例相当の9行がある(図2)。これによれば門、喰違、口々番所張番御門番等、社堂、供屋馬屋、溜池、朱塗門、堀溝、階橋、大路小路、土居、役所等を扱っている。これを手懸りに図を見ていきたい。

図の上方中央辺に右に御本丸、左に二之丸とあり、その上には(本丸二之丸の西側になる)山裾の斜面が種々の植物で描かれている(図3)。御本丸と二之丸は、大路(広場を含む)小路と外部から見通せる建物を主にして名称が載せられている。御本丸とその一部の大奥は空白、二之丸周辺は外御庭、御台所、大奥の名称が載っていて御本丸より名称が載っているものは多いが、大半は空白である。御本丸については「御殿内御座々図」が別途書かれており、詳細はそれに譲ったのである。

3 御本丸を守る内堀(濠)と城の境界としての堀(濠)

本図で先ず注目されるのは、御本丸の北、東、南を四辺形の端を堀(水が入っていれば水濠であり、濠とすることが多かったここで述べる堀は原則水を湛えた堀だったので、以下濠としたい)が囲んでいることである。南の濠は北に比べて半分の長さであるが、濠が存在したことが強調されているのである。地形等を考慮すれば、本丸の西は急な崖で、他の3面は濠で囲まれていて、厳格に守備されていた。なお東の濠幅は、南北に比べ1.5倍弱広く、正面を意識している。そしてこの3面の濠のうち、北側と東側の外側には土居が巡っていた。この正面を意識した濠と土居の東側は大路であり他と異なっていた。

以上で、鹿兒島城で藩政末期に重視され、本図で本丸とされた曲輪は、3方に濠がめぐらされていたと確認できる。この濠は城内部で最も重要な曲輪を最後まで防衛する役割があり、当時内堀(濠)と呼ばれていた。

ところで濠といえば、御本丸の北側から海岸にかけては濠・土居・中幅路を挟んで御厩役所があり、この役所の北側には図の上から下まで、図中最も幅広な直線の濠があっ

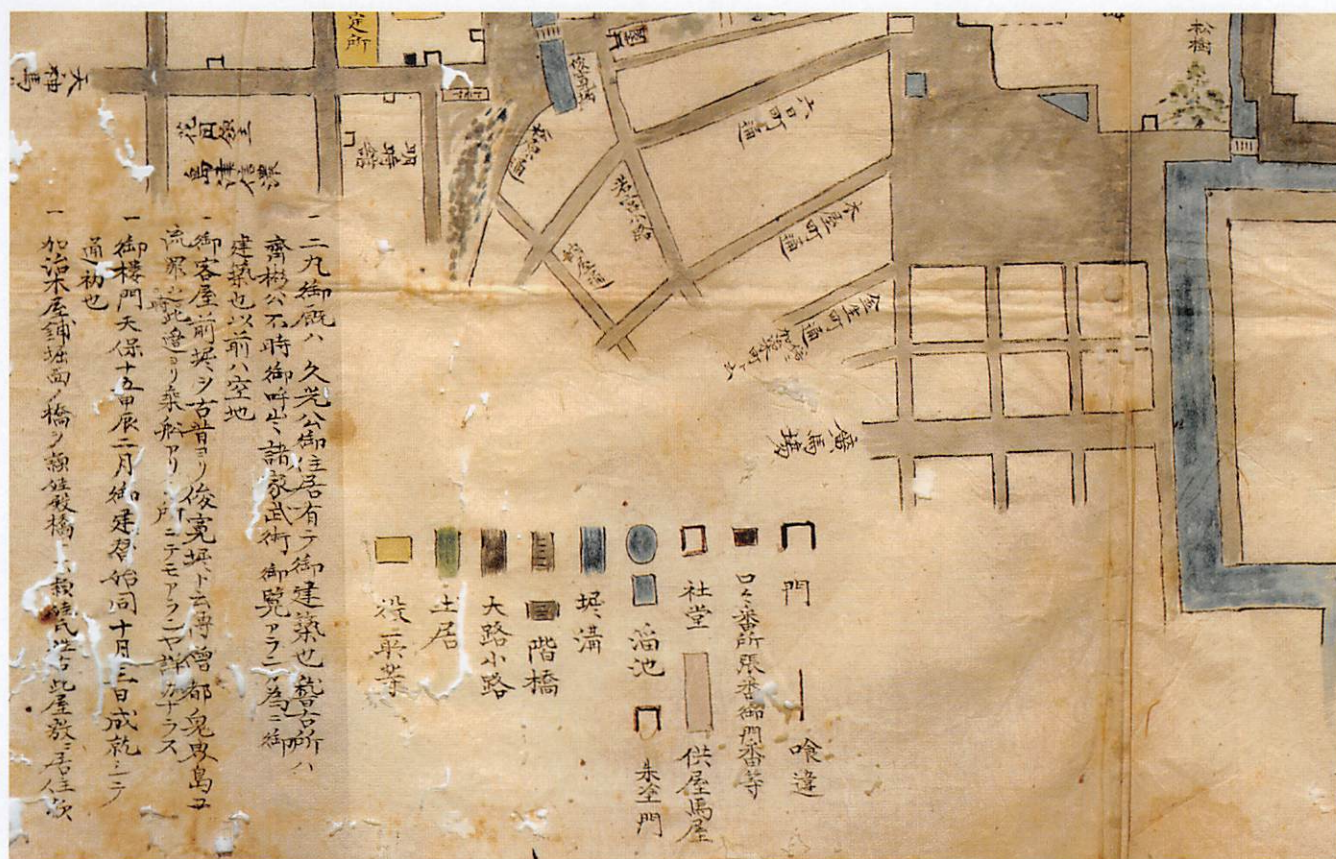


図2 凡例相当部の説明の図（部分）

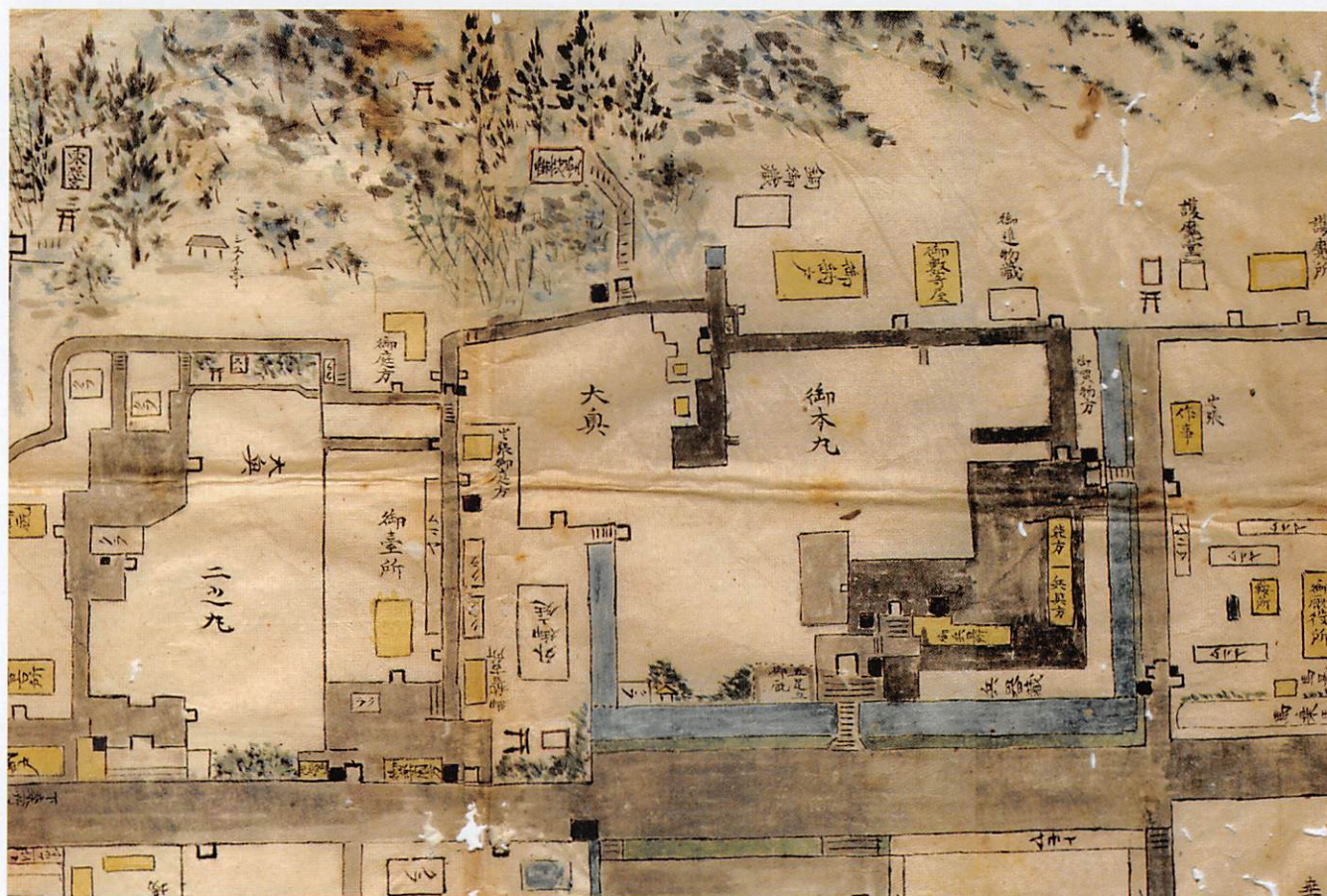


図3 御本丸・二之丸と西側の図（部分）

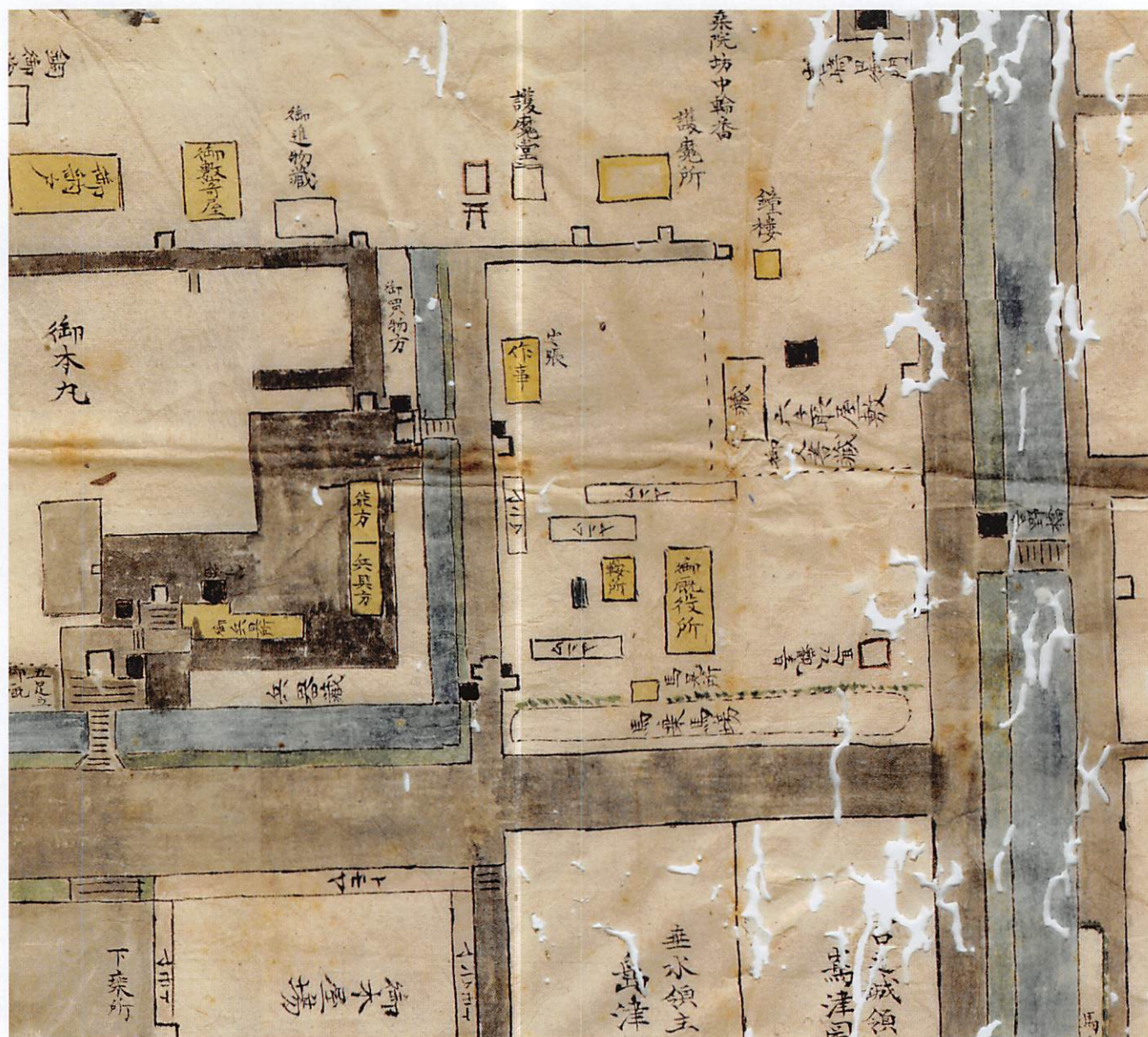


図4 御厩役所の北側の吉野橋付近の図（部分）

た（図4）（本図中の文章に吉野橋・堀・土居は鹿児島城築城の際、城下士が築いたとある、但し築造については検討が必要である）。一方、二之丸の南側の御勘定所・山奉行所・宗門方・御代官所曲輪と大路で隔てられた南側辺と、その上の観音堂境内地から、造士館脇の南側の枡形の南側までには、図の上から下にかけて中幅の濠がある、この濠は西端で南に折れ、白尾屋敷の下に続いていた（図5）。この南に折れた濠は吉祥院の前で、西側大手口付近から流出した細い濠を受け入れていた、またこの南に折れた濠は、大手口から東に通じる道に接するまでは、両側に土居があり、その道の南側は、白尾屋敷前まで、東側には土居があった、又南に折れる濠の西側の土居の北側は、中幅の堀が観音堂の北端まで続いていた、この部分は（但し図5では西

側大樋口、南側白尾屋敷は写っていない）濠と土居とが複雑に交差しているが、図の上端の大手口から東に通ずる濠が、一度北に折れて造士館前の枡形付近に至るとみるなら、前記した御厩役所の北側を東西に直流した濠と対になる濠と見なすことができる。この二之丸の南側の濠は、南に折れる地点から東に向かつては、両側に土居があり、観音堂の南東角で、堀の南側の土居はなくなり、細い道となりそれも、本丸・二之丸の東側の大路と交わる地点からは堀の北側にだけに土居がある状況となっていた。なおこの濠は枡形の東に、御客屋（普通は御着屋とするが、正確を期すなら御春屋）の北側を東に伸び、その先端部分を俊寛堀と呼んでいる（本図中の文章にもある通り、ここは俊寛が配流された際出航湊だったとして愛称地名となっている。な

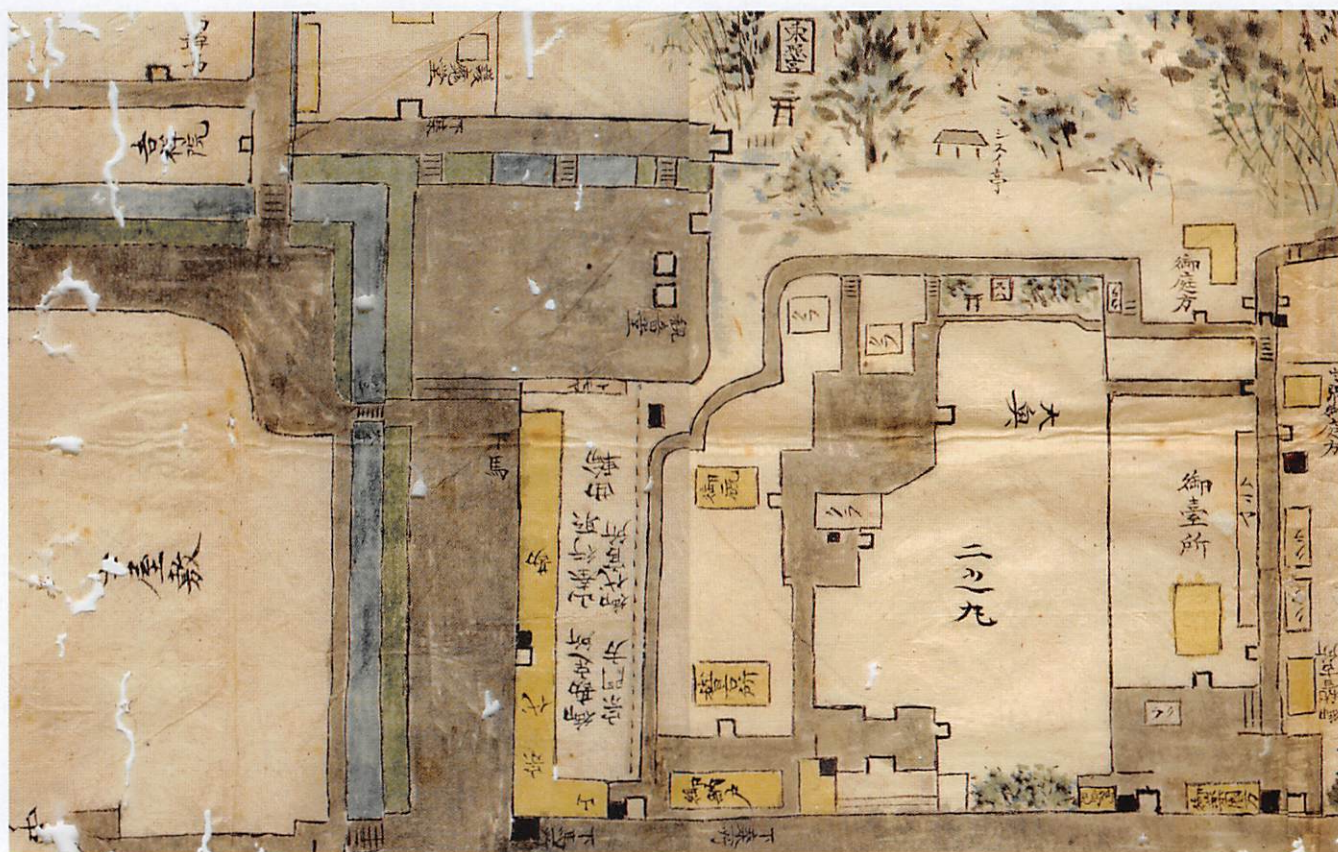


図5 大手口・白尾屋敷・観音堂付近の図（部分）

おこれら一連の説明に、甲突川の移設に関わる者が一切見えないのは注目すべきところである（図6、西側は図5から続く濠があり、更に東に続くが一部写っていない）。濠は北に折れ、日除地、竹山を通り、以降小松屋敷の東～北を通して名山堀に繋がっていたと思われる。図中の広場のなかに見える溜池はその名残であろう。この様に本図中で最も目立つ施設は、本丸と二之丸の北側と南側に置かれ西の山裾に発し、直線に湾に通じる北側の濠と、西の山裾の大手口付近に発し、北に折れて直線様になり、2回以上、北に折れ曲がりつつ湾に通じる南側の濠とであり、両濠は一对と考えられていたと思われる。両者とも城下の内にあり、即ち濠の両側に重臣層の屋敷があり、この濠が鹿児島城の防衛の施設とは考えられない。それよりは鹿児島城主の領国統治のための施設地域であることを明示する効果があったとみておきたい。

ところで以上扱ってきた堀（濠）は、本丸の周囲の濠を内堀（濠）と呼ぶなら、外堀的な位置付けになる可能性があるが、北の濠のすぐ北には滑川があり、小流とはいえ存在感があったし、更に上方限の北側には稲荷川があり、南の濠の南には甲突川が存在していたおり、これらの川こそ鹿児島城の城下を防衛する性格が強いので、外堀と考えら

れた可能性が大きい。とすれば、本図の右下の出物蔵内、屋久島方、築地御茶屋、御細具所、新格蔵、郡見廻在番所、御作事方の地を囲んでいた名山堀の範囲も（図7）、鹿児島城主の領国統治のための施設地域であることを示すものでもあって（言うまでもなく海からの荷上場の性格も考慮されていたであろう）、南北に作られた大きな濠と類似した性格も持っていたのである。

この点について本図の文章中には30～40年以前は新橋堀末迄大船が繋がれていたという指摘があり、名山堀は無論、南北に作られた大きな濠は船入の性格を担っていたことも考慮しておきたい。

4 鹿児島城は山城と屋形で構成されている

本図は前記通り鹿児島城を「封建の嚴備」の骨格であったとして執筆されたものだったので、近年まで通俗的にうけいられていた「鹿児島城は粗末な城」、「鹿児島城は簡素な城」、「鹿児島城は価値観が低い」とする軽佻な雰囲気とは全く異なったもので、城が機能していた時期の空気に満ち溢れており、貴重な内容を持っていた。とはいえ、鹿児島城の屋形と周辺の実態究明に関心を集中させ、鹿児島城の全容を説明する機会が少なかった。

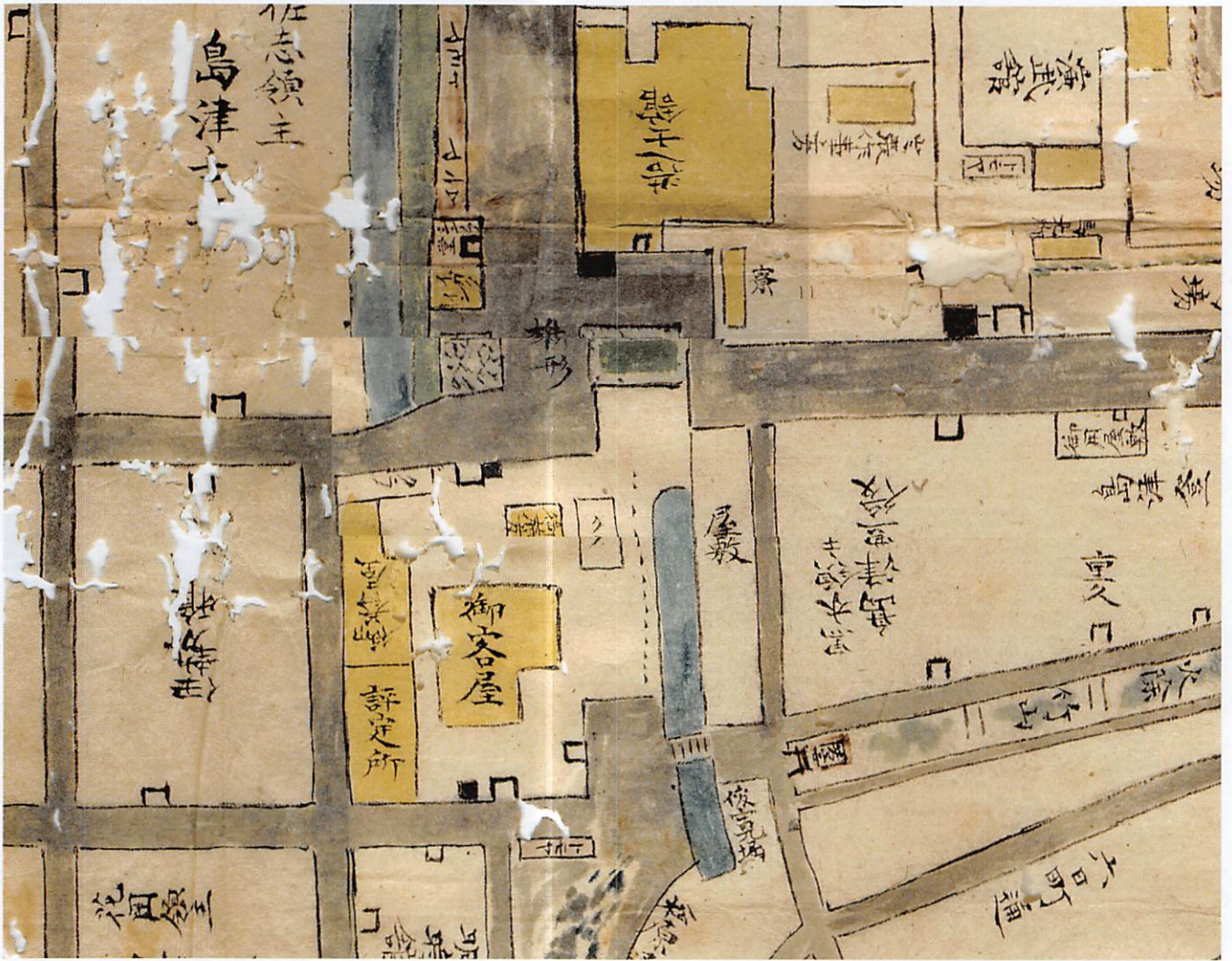


図6 枅形、俊寛堀付近の図（部分）

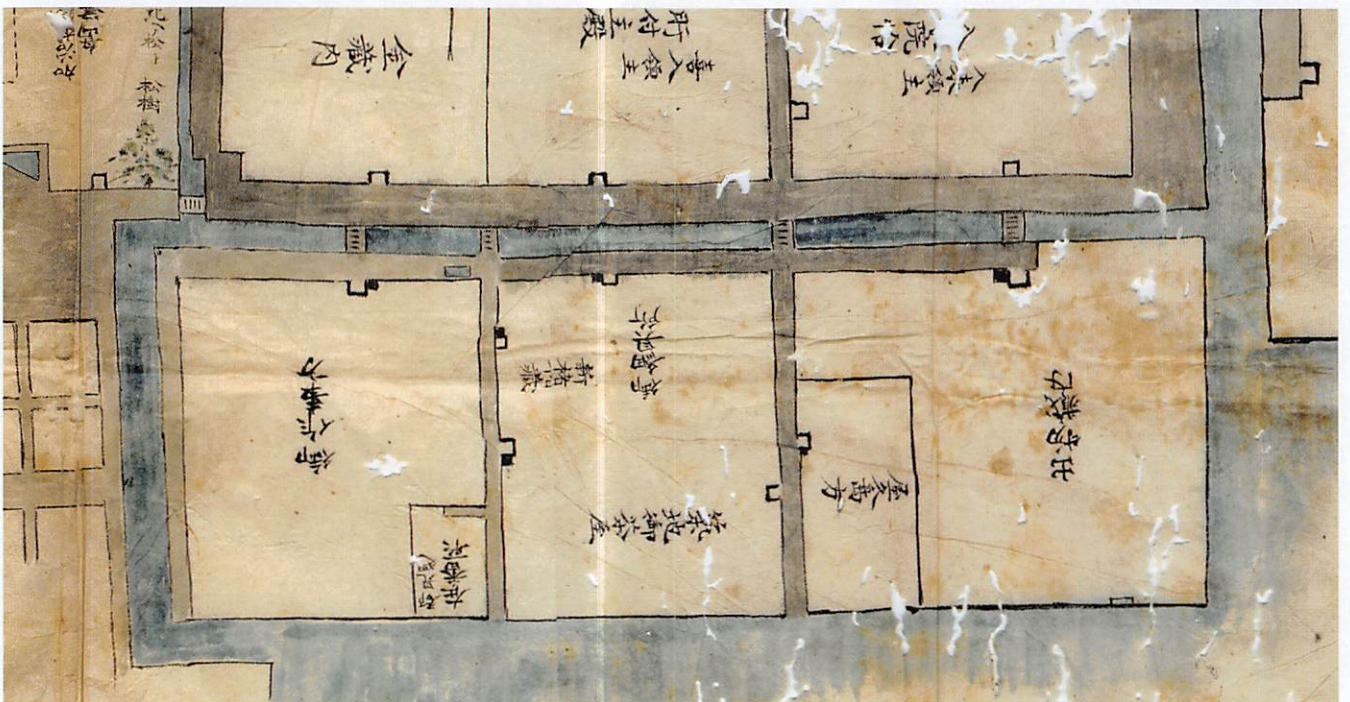


図7 海岸沿いの役所付近の図（部分）

そこで、図示されてはいないが、同図中の文章から鹿児島城の全体について検討してみたい。

まず鹿児島城は慶長7・1602年に島津藩主初代家久が、鹿児島の上山地域に築いた。その上山城は南泉院の上から、島津右衛門上辺り迄御本丸であった。平上柿本寺上辺り迄は御曲輪の内であり、岩崎の蓑田伝兵衛の門前には旧枅形跡があったとする。即ち家久の築いた鹿児島城の山城に触れつつ、新照院口から岩崎口迄としている。これは、確実に城域である。そして岩崎の後方へ山越する際の谷を「城の谷」といい、御城の新照院口は草牟田へ通じている。夏陰にも通じた山道がある。その草牟田稲富氏の屋敷は、往古の火立番屋の跡というを書いていた。即ち新照院口から城の谷、草牟田、夏陰周辺も鹿児島城の関連地域で、鹿児島城として大事にすべしという意向の表明なのである。火立番屋は城の外郭部に当たる可能性を指摘したともみさせるのではない。勿論鹿児島城内とは言っていないが、この場で新照院口から城の谷、草牟田、夏陰周辺を挙げたことが重要だと思われる。

そのうえで岩崎口、大手口、新照院口番所は、御サト通御門同様城下士の勤番であるとし、これは西田橋等の番所は足輕の勤番であることや、新橋、枅形番所は大身分の家来の勤番であることと比べて、重要な警護地点と強調しているのである。即ちすでに指摘した新照院口、岩崎口、大手口の範囲を鹿児島城内と再確認した内容になっているわけである。

本図の文章中には鹿児島城を、屋形の御本丸と二之丸の説明で終わらせたくないことが明瞭に示されている。また屋形に関しても山下橋口、黒木邸小路、金蔵角、広小路に喰違（本稿では、枅形と表示している）があったとしており、この周辺の警備強化について書いており、御本丸と二之丸の東側の大路で鹿児島城を画することはできないことを強調したと読まねばならないのである。

おわりに

本稿は、鹿児島市立美術館蔵の成尾常矩「鹿児島城屋形及び周辺図」以外に、ほぼ同一の図が存在していることを確認し、合わせて同図の描写と説明文章から読み取れることを粗いままではあるが報告したものである。美術館蔵成

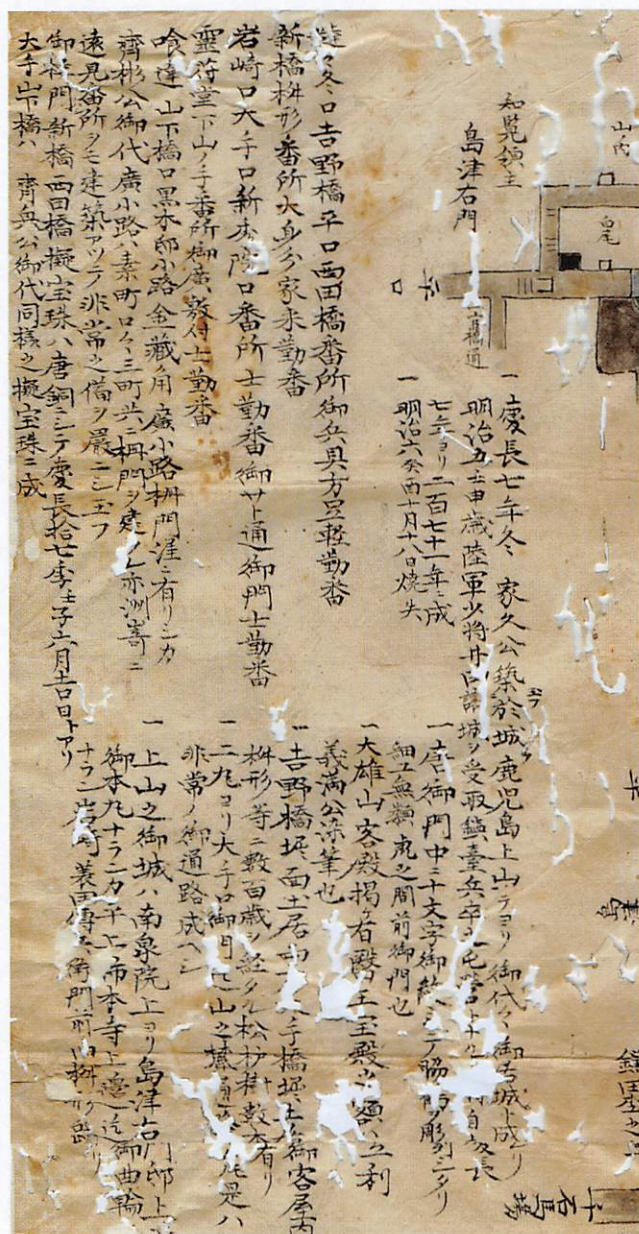


図8 説明文の一部（部分）

尾図については、多くの先達の言及があり特に五味克夫氏には詳細で精緻な報告がある。それらによっているところが多い。改めてここに感謝を申し上げたい。また本図について、ご配慮いただいた皆様にお礼を申し上げたい。

本稿は鹿児島城を、山城と屋形の併置とみなすという観点で、成尾「鹿児島城屋形及び周辺図」を見直したものである。